

# 「日本3.0」

Vol.31

## 日本の偉大な経営者を再発見すべきだ

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

近年、イノベーターというと、ステイプ・ジョブズやジェフ・ベゾスなど海外の例ばかり出てきます。そんな風潮に飽き飽きしている人は多いのではないだろうか。

世界最先端のイノベーターから学ぶのもいいのですが、明治、大正、昭和を彩った日本の偉大なるイノベーターから学ぶこともたくさんあります。

ただし、そうした先人の叡智が現代にほとんど引き継がれていません。私は大学生に講演する際はいつも、松下幸之助、本田宗一郎、盛田昭夫、

井深大の写真を見せて、「この人たちが誰だかわかりますか」と質問してみるのが、正答率は「ほぼゼロ」です。

そうした無知は、学生の責任というより、歴史をしっかりと次世代につないでこなかった大人、とくにメディアの責任だと思います。

私自身、平成が終わる2019年は、先輩イノベーターたちに徹底的に学ぶことによって、新しい日本を創るヒントを見つけたいと思います。たとえば、昨年末に鹿島茂著『小林一三ー日本が生んだ偉大なる経営イノベーター』を読みました。スケールの大きさと現代への示唆の多さに感嘆しました。

小林一三は、阪急電鉄、宝塚歌劇団、阪急百貨店、東宝、阪急ブレーブス、第一ホテル、昭和肥料(後の昭和電工)をつくり、東京電燈(後の東京電力)を再建し、商工大臣も務めた人物です。さらにもともと小説家志望で多くの著作を残した上、茶や俳句を愛した文化人でもありました。

鉄道、住宅、小売り、エンタメ、エネルギー、アート、あらゆる分野で日本を進化させた「怪物イノベーター」なのです。

小林一三は死の27日前、1956年12月29日に行った最後の演説でこう述べています。

「日本は大したものになる。それは私が保証します。諸君は安心してよい。ただそれには条件がある。それは国民全体が働くことだ。努力することだ。努力を惜しまなければ日本は実に立派な国になる。若い人はほんとうに任せだ。働けば必ず仕合せになれるにきまつているからである」

小林一三はほんの一例です。私自身は、福澤諭吉にメディア創りを日々学んでいますが、あらゆるビジネスパーソンは、師匠と仰げるイノベーターを日本の歴史から見つけることができるはずだ。

「シリコンバレーや中国ではこれが流行っているよ」といった話に加え、「こんな苦難にぶつかったとき、盛田昭夫はこう立ち向かったそうだよ」といった会話が自然と行われる。そんな古今東西の実践知に満ちた経済社会を創れば、日本はきっと明るい新時代を迎えられるはずだ。



### Profile

NewsPicks COO (チーフコンテンツオフィサー)

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。2014年7月からソーシャル経済メディア「NewsPicks」の編集長を務めた。2018年4月より現職。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」「日本3.0」がある